平成 28 年度寺田寅彦記念館友の会総会　記念講演要旨

「寺田寅彦作品と国語教科書」

講師　山田　功　様

1　このテーマの取り組みのきっかけとなったこと

（１）飯島宗一氏や外山滋比古氏、三木卓氏などは、教科書で学んだ寺田寅彦作品のことが、後々までも甦ってくると言っています。そういうことを知り、国語教科書に掲載されている寅彦の随筆などを調べてみようと思いました。

（２）中谷宇吉郎雪の科学館の当時館長をされていた神田健三さんが、私は教科書に掲載されている中谷宇吉郎の随筆について調べているから、おまえは寺田寅彦について調べてみてはとお誘いを受け、以後調査を進めております。

2　寺田寅彦随筆の教科書掲載の歴史

（１）大正時代

・寅彦作品が初めて教科書に掲載されたのは、大正 12 年（1923)、旧制中学校「国語及漢文」用教科書『国文新読本』で、作品は「小さな出来事　四　新星」です。

この時代に、中学校、女学校の教科書には１８作品が掲載されました。「小さな出来事」から 4 作品（「蜂」、「乞食」、「蓑虫」、「新星」)、「花物語」から 4 作品（「凌霄花」、「芭蕉の花」、「野薔薇」、「楝の花」）です。

・採録数が多かったのは、「森の絵」、「田園雑感」の 6 回、「先生への通信」、「蓑虫と蜘蛛」の 5 回です。

（２）昭和初期（第 2 次世界大戦前）

「新星」、「蜂」、「森の絵」の採択は、際立って多くなっています。「線香花火」、「『手首』の問題」、「藤の実」などいわゆる科学随筆が現れます。また、「科学者と芸術家」、「科学者とあたま」、「言語と道具」といった文明批評分野の随筆もでてきます。

（３）昭和戦後期

「鳶と油揚」、「とんぼ」、「茶碗の湯」、「藤の実」など科学随筆が多くを占めるようになります。

昭和 40 年以降、急激に掲載する教科書が減少し、昭和の終わりころには、1～2 社ほどとなります。

（４）ローマ字文

教科書に掲載されている随筆の中で、変ったものとして「たぬきの腹つづみ」があります。

これは、ローマ字で書かれています。寅彦はローマ字運動に熱心な、恩師田丸卓郎の影響でたくさんのローマ字文を書いています。そのひとつがローマ字教育の教材として、掲

載されているのです。

（５）手紙文

随筆だけではなく、手紙文「お礼の手紙」、「夏のたより」も掲載されています。

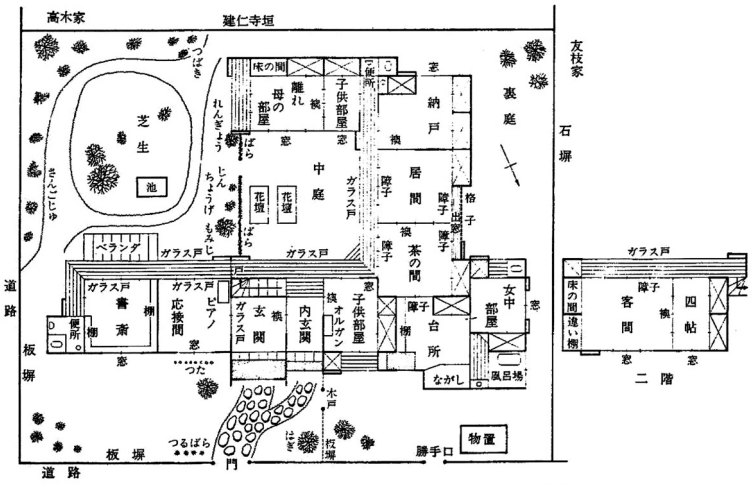
３　教科書で最初に掲載された「新星」を深読みしていきました。

（１）「新星」を含む随筆「小さな出来事」は、大正９年（1920）「中央公論」に吉村冬彦の筆名で発表されました。３年後「冬彦集」に収録され、多くの読者を得ることになります。教科書に掲載されたのは「冬彦集」が世に出た、およそ半年後です。当時、寅彦の作品の評価は相当高かったことが推測できます。

（２）この作品が書かれたのは、寅彦が大学にて胃潰瘍で吐血をし、静養に入った間に書かれたものです。

（３）「新星」を深く読み込んでみます。

「本郷区駒込曙町13番地の頃の寺田家の平面図」を掲示しながら話が進みます。



①毎年夏になってそろそろ夕方の風が恋しい頃になると、物置にしまってある竹製の涼み台が中庭へ持ち出される。これが持ち出される日は、私の単調な一年中の生活に一つの著しい区切りを付ける重要な日になっている。

涼み台の置かれた中庭が、図面でよくわかります。母の部屋、子供部屋、居間で囲まれた家の中心的な空間です。

寒さが苦手な寅彦が、元気の出る夏を待ち遠しく思う様子がよくわかります。備忘録「夏」にもそんな気持ちが書かれています。

②涼み台の外に折り畳み椅子が三つ同時に並べられて一同が中庭へ集まる。

一同が集まれるということは、寅彦にとってとてもうれしいことです。寺田家はいつも誰かが病気をしていて、医者の世話にならない日がないくらいです。元気で一同が集まれる喜びがよくわかります。しかし、よく読んでみると、中庭に集まっているのは、寅彦、母、子供５人です。子供たちの母親がいないのです。当時の家庭の事情が伺えます。

③今年の夏始めに、涼み台が持ち出されて間もなく、長男が宵のうちに南方の空に輝く大きな赤味がかった星を見付けてあれは何かと聞いた。見るとそれは黄道に近いところにあるし、チラチラ輝きをしないからいずれ遊星にちがいないと思った。そして近刊の天文の雑誌を調べてみるとそれが火星だという事がすぐに判った。星座図を出して来てあたってみるとそれは処女宮の一等星スピカの少し東に居るという

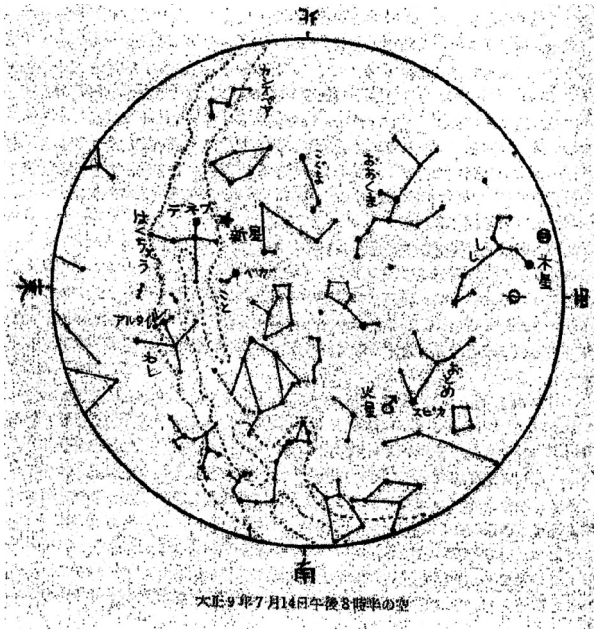
事がわかった。それでその図の上に鉛筆で現在の位置をしるし、その脇へ日付をかいておいて、この夏中のこの遊星の軌道を図の上で追跡してみようという事にした。

［星座図（大正９年７月 14 日午後８時半の空)］を提示していただいて話が進みます。

ここに位置しているのが「火星」です。この位置を息子東一さんと記録をしていこうと書いております。

［［天動説」と［地動説」の図と「火星の軌跡」］の図を示して話が進みます。

この火星の軌跡から、惑える星［惑星］の話、さらに地動説の話を寅彦は息子東一さんにしたかったのではないでしょうか。



④ある朝新聞を見ていると、今年卒業した理学士K氏が流星の観測中に白鳥星座に新星を発見したという記事が出ていた。その日の夕方になると涼み台へ出て子供と共にその新星を捜したらすぐ分かった。

K氏とは、理学部天文学科を出たばかりの 26 歳、神田茂氏です。このことは、寅彦の日記にも書かれていますし、大正９年８月号の「天文月報」に神田氏自身がこの日のことを書いています。

⑤コメットハンターの関勉さんが 1987 年 11 月 25 日に発見した小惑星には、［トラヒコ］と命名されました。寅彦がこれを知ったならば、どんなに喜ぶことでしょう。

まだまだお話したいことがありますが、時間ですのでこれくらいにして終わります。このように短い文ではありますが、読んでみると深い内容を持っていることがわかります。教科書では章末の［学習の手引き］等で、押さえどころを示しています。さらに教科書を調べ、寅彦の作品を読んでいきたいと考えています。と語られて講演は終わりました。

今、寺田寅彦の銅像を建てる取り組みをしておりますが、寺田寅彦を子ども達にどう伝えていくかということを考えている時に、以前教科書に掲載されていることを山田様からお聞きをしていたので、その内容を小・中学校へ提供できればと考えていました。ちょうどそんな時に、今日のお話を聞くことができて、今後の取り組みが見えてきたように思います。山田様の取り組みが今後さらに進んで集大成をして改めてご提供いただけることを心待ちにしつつ、いろいろご示唆がいただけたことに感動を覚えたことでした。ありがとうございました。